

「ローカルベンチャー」という 新しい起業のかたち



ファッション
テーター

渡邊 さやか 氏
（一般社団法人 Velterra 代表理事、岩手県陸前高田市）

登壇者

小尾 勝吉 氏

（愛さんさん宅食株式会社代表取締役、宮城県塩竈市）

久保田 靖朗 氏

（合同会社 3E3E 代表、宮城県七ヶ浜町）

井筒 耕平 氏

（村楽エナジー株式会社代表取締役、岡山県西粟倉村）

プレゼンテーション概要

小尾 宮城県塩竈市で、障害者やお年寄りの方に食事の宅配サービスをしている。実は障害者・高齢者に関する分野に疎いまま、起業した。弱者の負の連鎖を断ち切るのが目標。要介護者は増えるのに、介護を担う人は少ない。石巻市で考えると、1人の介護要員を3名で取り合っている状況。今年の2月に全国向けの宅食サービスを始めた。配送方法を工夫して、半島や離島などこれまでなかなかサービスが行き届かなかった地域にも届けている。また、その延長で介護サービスも導入を始めた。職員に介護資格を取得させている。お客さん・スタッフが「この会社に出会えて良かった」というような会社を目指している。

久保田 宮城県七ヶ浜町で、「海の軽井沢・七ヶ浜」をテーマに、これから事業を行っていく。七ヶ浜町は、仙台から30分くらいで行くことができる場所。東北で1番古くて、日本で3番目に古い海水浴場。コンセプトは「仙台圏の週末リゾート 菖蒲田浜」。2040年代に消滅する可能性がある都市に、七ヶ浜が入っている。ビーチでのイベント、カフェ、清掃の事業を展開中。菖蒲田浜を仙台圏のリゾートに戻したい。きれいにするだけではダメで、「遊んでいい場所なんだよ」という風にイメージを転換していくことを目指している。これは若い世代がやっていかなければならないこと。

井筒 岡山県西粟倉村で観光業をやろうと考えていたが、地域資源として木があることに気付いた。木のエネルギー利用をしようというのがスタート。現在では日帰り入浴出来る温泉を薪ボイラーで回している。最初は化石燃料を使用していたが、木を使うことでエネルギー代が大幅に削減した。薪ボイラーの灰は肥料として使えるため、物々交換という形で地域の人から野菜などを頂いている。ゲストハウスも経営しており、食材が必要なので有難い。週一の介護サービスもやっている。人々が必要なことをやっていけば、よそ者も受け入れてもらえることに気づいた。ハードを作るのは苦手だから、ソフト面を作ろうと考えてきた。そこで自分の居場所を見つけた。

ディスカッションより

- 東北や地域ではどんどん状況が変わっていく。その変化に合わせて、事業を展開している。（渡邊）
- 東北になじむことは鉄の壁だった。どうやって壊したか？ とにかく実績を積むこと。（小尾）
- 帰らずに地域に居続けたのは、地域の人言葉。「家も、地域も一緒だ。人がいないとダメになる。だから俺はこの場所を離れねえんだ。だから俺はできることなんでもやるから」とってくれた。（久保田）
- 耐えるっていう感覚じゃない。認めてもらおうと思ってやるわけでもない。その先を見る。まずは信頼作ってやっていくって決めたわけだから、当然やる。そのシンプルな思い。（小尾）
- バイオマスエネルギーを地域に導入させたいっていう思いがあった。ダメな意見ばかり聴いてもしんどいから、応援してくれる人を増やしていく。（井筒）
- きれいなストーリーになりがちだけど、みんな受け入れられなかったり苦労している。その地域に求められること、必要なことをどんどんやっていくのが、ローカルイノベーターが事業を拓げていく理由かもしれない。（渡邊）
- 地域おこし隊でエネルギー事業をする一スタッフとしていったが、プレーヤーがいなくて気づいた。じゃあやるしかないか、と。「こわい」という思いはあるけど、田舎にいと米植わってる。だから死ぬことはないなと（笑）。（井筒）
- そこに骨をうずめなくてもいいと思う。ただ、どう関わるのか覚悟を決めるのってすごく大事。（渡邊）